



万之瀬川（まのせ）について

万之瀬川は、薩摩半島最大の川で、鹿児島市の錫山付近に源を発し、南九州市を経て、南さつま市の吹上浜の砂丘に至る。河口には日本最大規模のハマボウ群落やハクセンシオマネキの生息地があり、「万之瀬川河口域のハマボウ群落及び干潟生物群集地」として平成19年に国の天然記念物に指定される。また、水車の動力を利用した「水車からくり」の伝承地として知られる。



万之瀬川の現状

当組織は、万之瀬川の中流域で活動を展開する。

川の中流域には、巨岩や奇岩などが多くみられる“こせ渓谷”や“こせの滝”、“轟の滝”があり、散策やハイキング、また巨石等を利用したロッククライミングやボルダリングのスポットになっている。

一方、形成された滝群は、アユやウナギなどの回遊魚の移動を阻害する大きな要因になっており、水産資源の保護・増殖の面においてはその対策が古くから望まれてきた。

こうした背景から、平成14年に滝を迂回するための「こせの滝魚道（日本で唯一稼働するボックス型魚道）」と「とどろきの滝魚道（全長802mの日本一長い魚道）」が整備された。

当時、万之瀬川で水産資源の増殖を図る川辺広瀬川漁協は、この整備に大きな期待を寄せた。しかし、魚道の維持・管理や周辺環境の整備に人の手を多く要することが判り、大きな課題となった。



組織の設立と活動の目的・方針

上記課題の中、漁協やその組合員が主体となり、平成25年度に「万之瀬川振興会」を設立した。

組織体制は、漁業者・漁協・市民団体（川辺故郷会）・農業団体（永田農地利用組合）・地域住民で構成した。

活動の目的は、①魚道および周辺環境の維持・管理、②万之瀬川の生き物の保護・増殖、③恵み豊かな川の魅力を後世に伝えることである。



○ 魚道および周辺環境の維持・管理

魚道内における堆積物等の除去。周辺環境の清掃および草木伐採による流入ゴミの堆積軽減

○ 万之瀬川の生き物の保護・増殖

耕うんによる河床のはまり石化の改善。石倉の設置および維持・管理によるウナギ等資源の保護・増殖

○ 川の魅力・保全の継承

地元小・中学生を対象とする体験学習会の開催

豊かな川をまもり、魅力を伝える

(1) 魚道および周辺環境の維持・管理

魚道内に堆積したゴミ等の除去や、周辺環境の清掃・草木伐採を行い、その機能を維持する。この取り組みは、年3~4回（1回あたり3~4日）実施する。草木伐採は、草刈り機やチェーンソー等を用いて行う。また、伐採した草木は集積し、地区の消防署に連絡し、野焼きする。



(2) 万之瀬川の生き物の保護・増殖

近年、魚道より上流の瀬に砂が堆積し、はまり石（沈み石）が増えている。そこで、川底を耕うんし、河床の浮き石化を図る。耕うんの方法は、当初は人力で実施したが、効果の持続に課題がみられた。そこで、現在は、ショベルカーで深く耕うんする方法で取り組みを進める。

また、現在、万之瀬川でもウナギの保護が課題になっていることから、石倉を設置し、その維持・管理に取り組んでいる。



(3) 川の魅力・保全の伝承

万之瀬川の魅力を伝え、その環境を保全する意識を喚起する目的で、体験学習を開催している。対象は、地元小・中学生や保護者など。学習会は、夏休みを中心に年2~3回実施。メニューは、川魚の生態や河川環境についての座学や標識放流等の体験などである。



活動の効果と今後の方針

魚道や周辺環境を維持・管理することで、施設内の水の流れを正常に維持することができている。また、周辺環境の草木伐採では、魚道への効果だけでなく、景観の保全によって、ボルダリングや散策等の訪問者の安心・安全が図られ、地域住民から高い評価を得ている。

耕うん活動では、瀬の浮き石化が図られ、アユのハミ跡や産卵が確認できるようになっている。また、石倉もウナギや小魚、エビ・カニ類の棲み家や隠れ場、餌場になっている。

今後も、活動を継続し、より多くの住民や子どもたちに万之瀬川の魅力を伝え、恵み豊かな川を後世に引き継いでいきたいと思う。

